

## 2022年のアユ資源調査結果概要

佐々木賀治・松田直往・太田滋規・臼杵崇広・大前信輔

### 1. 目的

アユの資源水準や成育状況を評価するため、魚群調査、成育状況調査、産卵状況調査およびヒウオ生息状況調査を実施した。

### 2. 方法

魚群調査では、1月から8月まで毎月1回、北湖の水深30m等深線付近の定線調査コース上に出現する魚群数を観測した。

成育状況調査では、エリとヤナの漁獲標本を収集し、体長等を測定した。

産卵状況調査では、8月から11月にかけて6回、北湖に流入する11河川の産卵場においてアユの産卵量を調査した。

ヒウオ生息状況調査では、10月から12月

まで毎月1回、北湖において網口1m×2mの角形幼生網による1,000mの水平曳きを18回行い1曳網あたりのヒウオ採集尾数を求めた。

### 3. 結果

魚群数は平年の34~123%で推移した(図1)。漁獲アユの平均体長はエリ、ヤナともに漁期当初から平年より小さかったが、エリ漁獲魚のみ6月以降は平年並となった(図2)。産卵量は58.9億粒で平年の約75%であった(図3)。ヒウオ生息密度は平年の28~154%で推移した(図4)。

これらの調査結果は水産試験場ホームページに掲載し、漁業関係者等へ情報提供した。

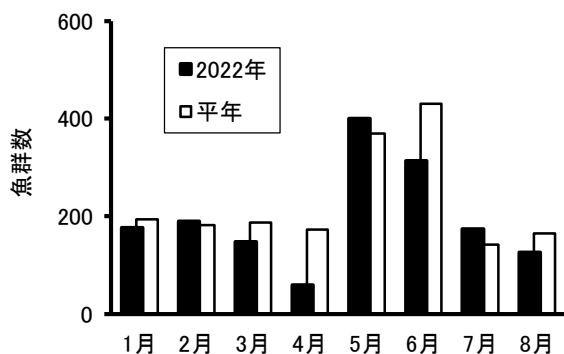


図1 魚群数の推移

※平年は過去10年から最大最小の年を除く平均値

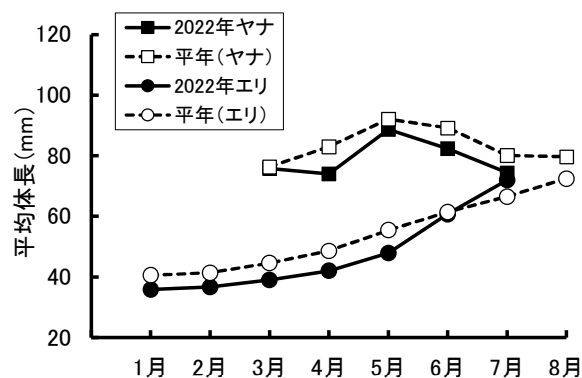


図2 エリおよびヤナ漁獲魚の平均体長

※平年は過去10年の平均値

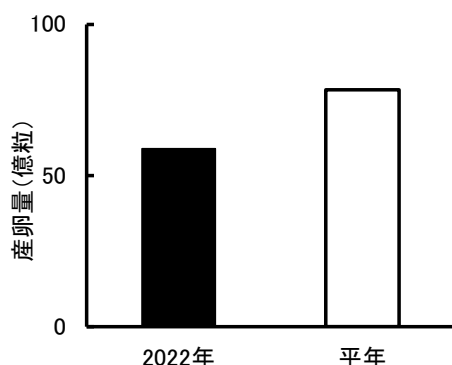


図3 天然河川における産卵量

※平年は肥満度が減少したH24年、調査が不十分であったH30年、最大、最小の年を除く平均値

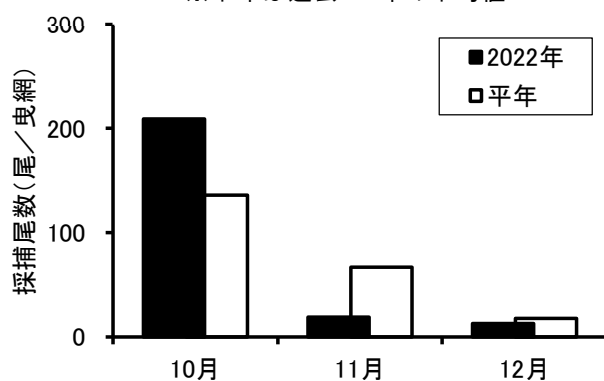


図4 ヒウオ生息密度

※平年は過去10年から最大最小の年を除く平均値